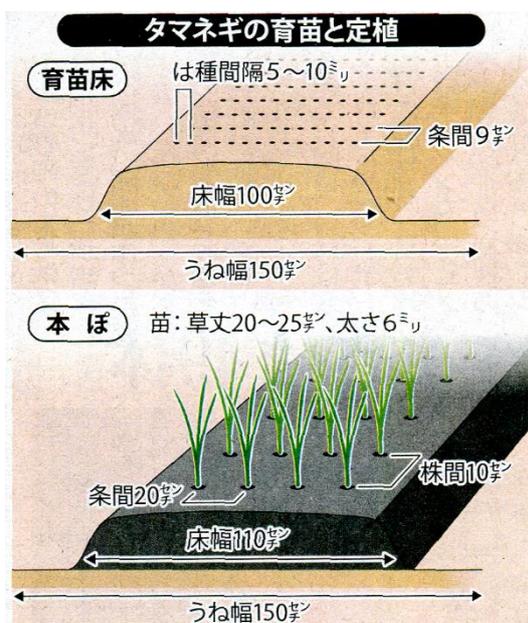




## 発芽後は適宜かん水

タマネギは中央アジアが原産で、古代エジプトの時代から食用とされている古い野菜です。

16世紀以後になってアメリカで品種改良され、日本には明治時代に導入されました。栄養価としては、ビタミンB、C、カルシウム、鉄分などが含まれます。タマネギを切っていると鼻にツンときて涙がでてきますが、これは硫化アリルという揮発性の催涙物質で、炒めたり煮たりすると甘みのある成分に変化します。また、硫化アリルの一つであるアリシンは、心身の疲れや夏パテ、イライラ、不眠症などに有効に働きます。



タマネギは気候的に寒さには強いのですが、その半面、暑さには弱く25度以上で生育障害を受けます。普通は秋まきし、翌年の春～初夏に収穫します。タマネギの球は長日で肥大が促進されますが、その反応は品種で大きく異なり、極早生種では日長11時間、10度以上、中晩生種では日長13時間、15度以上が必要です。暖地では極早生種（貴錦・浜育ちなど）により早どりから、中晩生種（錦毬など）による普通栽培が多いです。今回は、これらの栽培について紹介します。

ほ場は保水性があり、排水のよい場所が適します。種まきの適期は9月上旬（早どり）～9月中下旬（普通）です。肥料は苗床1平方メートル当たり、苦土石灰100グラム、堆肥2キロ、化学肥料120グラム（チッ素、リン酸、カリ15%の場合）を目安として施します。苗床は床幅1メートルの平うねとし、9センチ間隔に深さ1センチのまき溝をつけ、5～10ミリ間隔にすじまき

後覆土します。

発芽後は適宜かん水し、密な部分は間引きします。育苗日数は50日前後です。苗の大きさは、草丈20～25センチ、太さ6ミリを目標とします。本ぼの肥料は定植の1週間くらい前に苗床と同程度の量を施します。うね立て後土壌水分のある状態で黒ポリをマルチします。栽植密度はうね幅150センチ（床幅110センチ）、株間10センチ、条間20センチの44条植えとします。植え付け深さは3センチくらいで、深植えにならないよう注意しましょう。

タマネギは生育期間が長く、早どり栽培で2～4月、普通栽培で5～6月ごろ収穫期となります。収穫の目標は地上部の倒伏が始まってから1週間後です。早どり栽培の獲りたては辛みが少なくサラダでも食べられます。貯蔵を行う場合は、葉の部分を半分くらい切り、数個ずつ束ねたものを数個ずつ束ねたものを二つ結び、振り分けて風通しのよい軒下などの竿につるします。

（鹿児島県農業開発総合センター園芸作物部野菜研究室研究専門員）